

筑波大学社会・国際学群国際総合学類

卒業論文

寮生活における留学生のソーシャル・ネットワーク形成

ー東京日本語教育センター留学生寮の事例からー

2020 年 1 月

氏 名：波平 海

学生番号：201510392

指導教員：関根久雄

目次

第1章 序論	1
1. 研究目的.....	1
2. 研究方法	3
第2章 ソーシャル・ネットワーク研究の検討	5
第3章 東京日本語教育センターとは何か	9
1. 東京日本語教育センターの歴史・目的・カリキュラム	9
2. 東京日本語教育センターと留学生寮の1年・1日のスケジュール	10
(1)留学生の1年のスケジュール	10
(2)留学生の1日のスケジュール	11
3. 留学生寮の目的と各設備.....	11
4. 留学生データ(居住人数、国籍、国費と私費)	12
5. 留学生寮に居住する留学生を取り巻くアクター	12
第4章 ソーシャル・ネットワークの形成要因	15
1. 留学生のプロフィール.....	15
2. 親密な友人・コミュニティとは何か	17
3. 留学生が集う場と活動.....	21
(1) RA ルーム	22
(2) パーティー	23
(3) クラブ、バスケットボールコート	24
(4) 学生ラウンジ	25
(5)RA イベント	25
(6) キッチン・廊下.....	27
4. 4つの共有	27

5. 性格.....	30
6. 類似性.....	32
7. 相手への関心をもつ.....	34
8. 国・言語・文化が同じ.....	36
9. 偶然起こる友人の紹介.....	39
10. 中国人・台湾人の壁.....	39
11. 1人が国の印象を決める.....	41
12. 口に出して言えない留学生.....	42
13. オンライン上でのソーシャル・ネットワーク形成.....	43
14. 年による留学生の傾向.....	44
第5章 ソーシャル・ネットワーク形成への方策.....	45
1. 分析の目的と前提.....	45
2. 留学生が変えられる要因.....	46
(1)場所・活動への参加を増やす.....	46
(2)相手と多くを共有し、「良く」コミュニケーションしようとする.....	47
3. 寮の運営側が変えられること.....	48
第6章 結論.....	50
注.....	52
主要参考文献.....	53
Summary.....	57
謝辞.....	58

第 1 章 序論

1. 研究目的

日本における外国人留学生数が増加している。2018 年 5 月 1 日現在で留学生数は 29 万 8,980 人であり、前年比で 12.0%増加している。ここでいう「留学生」とは、「出入国管理及び難民認定法」で定める「留学」の在留資格によって、日本国内の教育施設及び日本語教育機関において教育を受ける外国人留学生をいう〔日本学生支援機構 2019〕。日本が留学生を受け入れる意義としては、留学生の出身国への理解や留学生と日本人の相互理解が進み、ネットワークができることが挙げられる。また、留学生と関わることで、日本人学生の国際的視野が広がり、日本社会が活性化する。その結果、日本の大学の国際化が進み、国際社会への貢献ができる、ということが指摘できる〔鈴木 2011:17〕。他に、留学生を受け入れる理由には、日本が直面している社会的課題も関係している。日本政府が留学生 30 万人計画を掲げて留学生の受け入れを推進する背景には、少子高齢化による労働者不足と日本の経済的不調がある〔山本 2014:270〕。日本の労働力不足を外国人で補うという発想から、留学生受け入れを進めている。また、留学生数の増減に関しては、入国管理政策や留学生の送り出し国の要因が大きな影響をもっている。さらに、入国管理政策自体も日本経済や国家間の政治的関係など様々な要因から影響を受けている〔大西 2016:11〕。このように様々な要因が絡み合うなか、日本政府は留学生の受け入れを推し進めている。

また、留学生にとって日本に留学する意義は様々である。意義の 1 つとしては、自国とは異なり、日本で学ぶことで優れた教育環境、研究環境を享受できることがある。他にも、日本の文化や日本を知るための手段として留学を利用している場合もある〔鈴木 2011:20〕。グローバル化が進む現代において、国際理解や経済的不調といった影響を受けながら、他国からの留学生受け入れが今後さらに進むことが予想される。

留学生の多くは、来日後、ほとんど知り合いのいない状態から、徐々に周りの人た

ちと接触、交流しながら、なんらかのコミュニティに所属し、友人関係を築き上げていく。これを「ソーシャル・ネットワーク」と呼ぶ〔田中 2000:74〕。ソーシャル・ネットワークは、個人と個人または個人対コミュニティという2つの関係を交えながら形成される。また、ソーシャル・ネットワークを「社会における個人と各コミュニティとの関係網」、コミュニティを「自分が所属しているグループ」と定義することもある。つまり、ソーシャル・ネットワークは、いくつかのコミュニティが集まり、形成されると考えられる〔山川 2011:51〕。これらの定義から、ソーシャル・ネットワークは個人が他者や社会と関係を構築していくことで形成されていくものだと言える。

さらに、留学生のソーシャル・ネットワーク形成の意義について、「留学の成功の鍵は人間関係のネットワークの構築だと言っても過言ではない。人間関係を広げることとは言語、文化、心理、留学生が構造的に抱える問題を解決するための社会的発言力など、多くの面で相乗的に効果がある」〔松下 1999:16〕と言われている。また、Blakeらは、留学生のソーシャル・ネットワーク構築は留学生の異文化適応や留学満足度、ソーシャル・サポート、留学の成功などにとって最も重要な要素の1つであるとも指摘している〔Blake et al. 2011:282〕。同様に、Bartらも、留学生のソーシャル・ネットワーク構築が留学生の学習成績や留学の満足度の向上、退学数の減少などにつながっていると、その正の効果を認めている〔Bart et al. 2014:165〕。他にも、留学では、まず信頼できる仲間を作ることから生活が始まり、それが上手くできるか否かによって、その後の生活の心地よさや安定感に深く関わると言われている〔花木,塩澤 2007:26〕。このように、来日した留学生が充実した留学生生活を過ごすためには、ソーシャル・ネットワークの構築が重要な役割を担っているのである。

ソーシャル・ネットワークの構築は日常のあらゆる場面で行われる。その1つがアパート、寮などの居住施設である。そのなかで外国人留学生と日本人学生または外国人留学生同士が寮生活を共にする「国際寮」では、寮生活での日常的な関わりを通して国際感覚を身につけることができる〔正宗 2015:2〕。例えば筑波大学の「グローバル・ヴィレッジ」という学生寮は日本人学生と留学生の混住シェアハウスであ

り、様々な国の学生と交流し、国際感覚を養うことを目的としている〔筑波大学 2016〕。また、国際寮の社会的意義として、「新しい寮環境を自分の居場所としていく力が身につく」、「仲間と協力して自分たちで共同体(コミュニティ)を作る力が身につく」〔正宗 2015:5〕ことが指摘されている。これは言い換えれば、国際寮での生活は、ソーシャル・ネットワークの形成が促進される場である。そして、その生活を通じてソーシャル・ネットワークを形成する能力を養うことができると言える。他の居住形態と比較すると、シェアハウス型かつ様々な学生と交流することを目的とした国際寮のような居住施設は、ソーシャル・ネットワークの構築がしやすい環境にあり、ネットワークの形成過程も観察しやすいと考えられる。また、留学生数の増加によって、日本で今後このような形態の居住施設は増加していくことが予想される。

これまでみてきたように来日した留学生のソーシャル・ネットワークの形成は、充実した留学生活を送るために重要な要素である。また、国際寮では様々な人と交流するので、ソーシャル・ネットワークが形成されやすい環境である。したがって、国際寮におけるソーシャル・ネットワークの形成を研究することは、留学生が日本での留学生活をより充実させるために、貢献することができると思う。また、留学生側からのソーシャル・ネットワーク形成過程とその要因を明らかにすることは、今後の寮運営に関する施策に反映させていくうえで有用であると思う。

そこで本稿では、東京日本語教育センター留学生寮に居住する留学生の語りを定性的に分析することによって、寮内における留学生のソーシャル・ネットワーク形成はどのように行われ、その形成要因は何か明らかにすることを目的とする。そして、留学生が寮生活をより充実させるための方策を提示したい。

2. 研究方法

次章でソーシャル・ネットワークに関する先行研究を検討したあと、東京日本語教育センターと留学生寮がどのような施設かまとめる。その後、第4章で、東京日本語教育センター留学生寮に居住する留学生 11 名に実施したソーシャル・ネットワー

クに関する半構造化インタビューの結果を、筆者の参与観察の経験も踏まえて記述する。それと共に、ソーシャル・ネットワークを軸として分析し、ソーシャル・ネットワーク形成の要因を明らかにする。

そして、第5章では、寮で留学生がソーシャル・ネットワークを形成し、充実した留学生活を送るためにはどうすればよいのか方策を提示する。

筆者は2019年3月26日から2020年3月下旬ごろまで東京日本語教育センター留学生寮にRA(レジデントアシスタント)として居住している。そして、調査対象者は筆者と同様に寮に居住する留学生である。筆者は2019年11月から12月の2か月間にわたって、11名にインタビューを実施した。対象者は性別、国籍、他の留学生との関り度合いに偏りがないように選定した。また、筆者が日常的に接している留学生だけでなく、ほとんど交流がない留学生も他の留学生から紹介をしてもらい、インタビューを実施した。インタビューはRAルームで30分～1時間にわたり1対1の対面形式で実施した。RAルームは留学生の相談部屋で、筆者を含む日本人学生5名のRAが、1人それぞれ月4回19時から21時まで相談部屋として開けている部屋のことである。インタビューの言語は日本語か英語または2言語の混合で、留学生が言語化しやすい言語で話してもらった。また、インタビューの内容は全て録音し、インタビュー後は書き起こしをした。インタビューの質問内容は留学生のソーシャル・ネットワーク形成に関する質問を中心に行った。

また、本稿では、ソーシャル・ネットワークの概念は「留学生が他の留学生と関係を形成していくことやあるコミュニティに所属していくことまたはその状態。」とする。インタビューで、留学生がその留学生と他の留学生との関係またはコミュニティとの関係の両方に言及することが多かった。そのため、本稿では、ソーシャル・ネットワークとは、個人とコミュニティ療法との関係形成に焦点を当てた概念とする。

第2章 ソーシャル・ネットワーク研究の検討

留学生のソーシャル・ネットワーク形成に関して、数多くの研究が行われてきた。山川は日本の大学で日本語を履修している留学生4名を対象とし、ソーシャル・ネットワークの形成に関する質的調査を行った。具体的には、留学生はどのようなソーシャル・ネットワークを形成しているのか、その中で最も重要なコミュニティは何か、それはなぜ重要となりうるのかを明らかにすることを目的とした。そこで山川は、留学生のソーシャル・ネットワーク形成過程はあるコミュニティが自分にとって重要なコミュニティになること、つまり「自分の居場所探し」であると述べている。また、来日後時間の経過とともに、コミュニティの参加→友人関係構築→コミュニティへの所属感→自分の居場所という段階を経て留学生のコミュニティに対する意識は変化していくと指摘している。さらに友人関係構築を促進する要因としては、相手との時間的・空間的共有が重要であることを明らかにした〔山川 2011:51,58-59〕。

また、範は中国人留学生Kに焦点をあてた留學生活の物語を描いている。そこでKにとっては教会が居場所であったことを指摘している。そして、その居場所とは、「個人が安心して自己を認められる空間であり、また他者との関わりの中でそのつながりが保証される場である。」〔範 2007:189〕と定義している。ここで、留学生が来日後に、必要としているコミュニティは自分が「居場所」を感じられるコミュニティであると言える。

ソーシャル・ネットワークを形成していく過程で、友人形成が達成された場合とされなかった過程の理由について、小松は中国人留学生に対してインタビューを実施した。その結果、留学生の友人形成のためには留学生自身の困難を乗り越える粘り強さと大学側の支援が重要であることが明らかになった。さらに留学生は友人関係に関する否定的な体験をしていながら、より積極的に日本人学生側に働きかけ、交流の機会を見つけたり、より多くの日本人学生に接したりすることで、友人形成を達成していることを明らかにした〔小松 2013:82-83〕。例えば否定的な体験とは、中国人留学生が中国に興味のある日本人学生に、中国の話をする途中から聞いてくれなくな

ったというような体験である〔小松 2013:75〕。

また、大学寮は、授業やクラブ活動といった一時的な交流の場であるコミュニティとは異なり、日常生活をベースとする連続した交流の場であるため、密度の高いソーシャル・ネットワークが形成されやすい。山川は、短期留学生同士のソーシャル・ネットワークの密度が高い理由として、日本語学校や文化イベントなど寮以外でも一緒に時間を過ごしていることを指摘する〔山川 2016:12〕。特に4月と9月は、入寮時期に合わせてウェルカム・パーティーなどのイベントが開催されているため、寮内のソーシャル・ネットワークが形成されやすいという〔山川 2016:13〕。また、短期留学生と日本人学生との間でA大学の寮は共有スペースを通じてソーシャル・ネットワークが広がっていった。他方、B大学の寮は共有スペースがほとんどないので、SNSでソーシャル・ネットワーク形成が行われていた。そして寮では、共有ルール、共有スペース・SNS、共有時間の3つが調和することでソーシャル・ネットワークが形成される〔山川 2016:14〕。この研究では、様々なことを「共有」することで、ソーシャル・ネットワークが形成されることが強調されている。

留学生と日本人学生が居住する混在寮で、多文化生活環境における学びとそれを促進する要因を、RA(日本人または外国人の寮サポーター)のインタビューを通して明らかにした調査では、「多様な参加の段階的経験を積むこと」、「ロールモデル」、「省察(行為についての省察・行為の中の省察)」の3つがあることが明らかになった〔吉田 2016:14〕。1つ目は、寮生としての役割、RAとしての役割と寮生活を過ごすなかで、寮内の様々な役割を経験することである。2つ目は、自分になりたいロールモデルを寮のRAから見つけ、それを目指していくなかで様々なことを学んでいくことである。3つ目は日々の寮生活のなかで自らの間違いや失敗に気づき、今後の成長に生かすことだ〔吉田 2016:4,6,10〕。これらを通して、混住寮で多文化生活環境における学びが促進されている。

大学の国際寮に居住する外国人留学生を対象とした寮教育の調査では、国際寮の有用性が様々な観点から示唆されている。人間的成長、自己形成の観点では、寮生活の中で、自分に自身がついた、明るくなった、積極的になったなどの変化が留学生から

挙げた〔正宗 2015:4〕。他にも、生活の場であるコミュニティの形成過程を実践を通して学ぶのに寮環境は適しているという指摘がある〔正宗 2015:4〕。つまり、寮生活は人間的成長、自己形成をしながら、留学生がソーシャル・ネットワークを構築していくことを実践的に学べる場であるといえる。

また、正宗は別の研究で、国際寮に1年間在籍した留学生にインタビューを実施し、留学生の実態を明らかにした〔正宗 2015:64〕。そして、その実態を5つに分けた。1つ目は、留学生にとって寮が自分の「居場所」となるには、いくつかの段階があることだ。2つ目は、留学生は共同体の1員として行動することの重要性を強く認識していることだ。3つ目は、日本人または他国からの留学生との接触の機会が多く、交流内容の質がいいほど寮生活の満足度が高いことだ。4つ目は、日本語力によって、寮環境の活用のしかた、周りから求められること、人間関係のネットワークの広がり方が異なってくることだ。5つ目は、生活の空間的構造が人間関係構築に影響することだ〔正宗 2015:70,71〕。これらから、国際寮に暮らすことで、留学生は様々な経験をし、学んでいることがわかる。

大学学生寮の中で留学生と日本人が構築する対人関係を、留学生の語りを通して明らかにした研究もある。その研究では、留学生が日本人学生との接近感について語るとき、同じアジア人、性格的に合うなどの共通性が軸になっている場合が多かった。その時、留学生が示す「わたし」は女性、大学生、アジア人など多様な自己からの発信であった〔出口,八島 2008:46〕。留学生は多様な「わたし」から相手に合う最適な「わたし」を発信し、日本人学生との共通点を見出していたのだ。

日本に住むアメリカ人留学生を調査した村上によると、留学生は当初特定の人だけでなく大勢の人と接触をして、その中から親しさを感じる人にはさらに接触を試みる傾向がある。例えば、アメリカ人留学生Aは、日本人、アメリカ人ともグループ行動しており、「友達とは個人的なつきあいをする。」と述べている〔村上 2005:7〕。このように国籍に関係なく、グループから個人的な友人関係を築くこともありうる。また、接触頻度が高いほど親密化が促進される。一方で、親密化を阻む要因として、自分との付き合いが負担になるのではないかという不安、相手の感情表現が

ないために親しみを感じにくいことが挙げられる [村上 2005:10]。感情表現に関しては、アメリカ人留学生から、「日本人はほとんど感情を表に出さない、アメリカ人は自分の感情や意見をオープンにする。」という指摘がある [村上 2005:11]。そのため、感情表現と親密さの関連については、文化の違いが影響を及ぼしていると考えられる。

また、日本人留学生のアメリカでの寮生活に焦点を当て、異文化体験の困難と魅力を調査した研究では、日本人留学生がルームメイトと良好な関係を築くためには、双方が相手に興味を持ち続けることが重要であると指摘されている [花木, 塩澤 2007:23]。つまり、ソーシャル・ネットワークを築くためには、相手に興味をもち、双方向のコミュニケーションを意識することが必要である。

このように留学生のソーシャル・ネットワークについての研究はあるものの、ほとんどの研究は留学生と日本人学生のソーシャル・ネットワークの形成過程や要因を検討するものであり、留学生同士についての言及はない。加えて、日本における留学生のソーシャル・ネットワーク研究は中国人留学生、アメリカ人留学生を対象に行われてきたが、その他の国についての研究はまだ見られない [呉 2017:35,37]。そして、山川が指摘するように、寮では密度が高いソーシャル・ネットワークが形成されやすい。また、正宗が指摘するように、寮生活はソーシャル・ネットワークの形成が実践的に学べる場である。

したがって、寮内における留学生同士のソーシャル・ネットワーク構築過程を分析し、その要因を明らかにすることは意義があると考ええる。

第3章 東京日本語教育センターとは何か

1. 東京日本語教育センターの歴史・目的・カリキュラム

東京日本語教育センター(以下、センター)は2004年に東京都新宿区北新宿に設立された留学生向け日本語学校である。センターは前身の国際学友会から数えると設立80年以上の歴史をもつ。センターの前身にあたる国際学友会は1935年に外務省の外郭団体として設立され、1936年から日本語教室を開設し、留学生の受け入れを開始した。戦前はタイ文部省など各国の政府機関や教育機関から留学生を受け入れてきた。戦中も留学生を受け入れた。国際学友会は学生の生活全般を支援し、帰国した留学生は、自国の指導的立場になり、日本との国際交流に貢献をした。そして終戦直後は、日本語教育を再開し、東南アジアの復興等国の施策を引き受けて事業を行ってきた。その後、2004年に政府の諸改革の一環として、国際学友会は日本学生支援機構東京日本語教育センターとなり、新たな船出を迎えた〔国際学友会の歩み2007〕。東京日本語教育センターは、日本語を学ぶだけの学校ではなく、時代の要請に応えて、その役割を変化させてきた機関なのだ。

センターは日本学生支援機構(JASSO)⁽¹⁾が運営しており、日本の大学院・大学・高等専門学校等の高等教育機関に進学を希望する約30か国の外国人留学生を対象とした予備教育を行っている。そして、センターは、日本政府の国費高等専門学校留学生、外国政府派遣留学生を中心に受け入れている。センターは、その役割として「将来の良好な対外関係を担う人材の育成」「国内外の企業・大学・官公庁等で活躍する高度な人材の育成」「日本語教育を通じて、国際相互理解の増進に寄与」の3つを挙げている。また、進学課程と大学院進学課程の2つのコースに分かれている。進学課程では、日本語と並行して理科系、文科系に分かれて基礎科目(数学、化学、歴史など)を勉強する。大学院進学課程では、日本語、英語、専門日本語(研究計画書の作成など)を勉強する。日本語、基礎科目ともにレベル別にクラスが編成されている。さらに、LL教室(日本語リスニングための教室)、PC教室、学生ホール、図書室、バスケットボールができる中庭があるなど設備も充実している。コースは1年コース(4

月入学)と1年半(10月入学)コースがあり、授業は月曜日から金曜日の毎日9時10分から16時00分まで授業がある[東京日本語教育センターホームページ]。センターには寮が併設されており、センターに通う留学生がその寮に居住し、共同生活を送っている。

2. 東京日本語教育センターと留学生寮の1年・1日のスケジュール

この節では、センターと留学生寮の1年と1日スケジュールを概観する。留学生は来日後、センターから東京日本語教育センターハンドブックを受け取る。それには行事予定表、授業時間・勉強についてなどセンターの生活に関することが全て網羅されている。また、筆者がRAとして寮に居住しているため、留学生の寮生活を日々観察している。そのため、1年と1日のスケジュールはハンドブック、寮の参与観察にもとづいて記述する。

(1) 留学生の1年のスケジュール

留学生は3月下旬から4月上旬にかけて入学し、4月5日に入学式と入寮オリエンテーションを迎える。留学生はそれぞれのプログラム、日本語力によってクラスが分かれ、4月10日に授業が開始される。5月22日には日本留学試験(EJU)⁽²⁾の模擬試験が実施される。そして、1学期終了直前の7月22、23日には期末試験が実施される。その後は夏季休業に入り、約1か月後の8月21日に第2学期開始となる。10月23日には日本留学試験(EJU)の第2回模擬試験が実施される。12月19、20日には1学期同様、期末試験が実施され、12月23日からは冬季休業に入り、1月14日に授業開始となる。そして、3月2日から4日に最後の期末試験が実施され、3月13日に卒業式を迎えて1年コースのプログラムが修了となる。その後、留学生は3月25日までに退寮し、それぞれの進路先に進む。また、学校の試験とは別の試験として、留学生が受ける試験は11月10日の日本留学試験(EJU)、7月7日、12月1日の日本語能力試験(JLPT)⁽³⁾がある。この2つの試験が留学生にとってはセンターで学んだことを発揮する本番である。特に、EJUは日本のセンター試験のようなもので、大学進学を目指している留学生にとっては最も重要な試験だ。また、夏と冬の長期休暇

になると、全体の約半分の留学生は帰国する。残った留学生は旅行や休日同様のことをして、日々を過ごす。

(2) 留学生の 1 日のスケジュール

学校がある平日は 9 時 10 分から 16 時まで 1 時間のお昼休憩を挟んで、寮に隣接する学校で授業がある。授業後、留学生はそれぞれが自由に時間を過ごす。例えば、学内の空手クラブへの参加、学校からの宿題、寮内のバスケットボールコートでのバスケ、料理、買い物など様々である。共有の学生ラウンジと寮の門限は 23 時までなので、留学生は 23 時を過ぎると全員自分の戻る。休日は試験がない日以外は学校からの宿題以外でやるべきことは特になく、留学生の過ごし方は自由である。留学生は、東京の観光名所巡り、勉強、買い物、映画鑑賞などをして自由に過ごしている。

3. 留学生寮の目的と各設備

東京日本語教育センター留学生寮の目的は、「居住の場を提供することにより学生生活を支援するとともに、寮における共同生活を通じて相互の国際交流と国際理解の増進を図ること」〔東京日本語教育センターウェブサイト〕である。寮は留学生への生活の場の提供だけでなく、留学生同士の交流を視野に入れて運営していることがわかる。

寮の居室は全部で 149 室であり、そのうち男性用が 89 室、女性用が 60 室となっている。また、共同施設は男女別で、洗濯室、シャワー室、学生ラウンジ、学生ホール、バスケットコートがある〔東京日本語教育センターウェブサイト〕。

寮は 5 階建てで各階は 29 または 30 部屋あり、各部屋はベッド、衣装棚、冷蔵庫、ベッドが備え付けられた 6 畳ほどの個室になっている。学生ラウンジは寮に入るとすぐにある広い共用スペースで、ソファや机もあるため、留学生同士が交流したり、くつろいだりできるスペースになっている。学生ホールは小さな体育館のようなスペースで、卓球台もあるため卓球もすることができる。借りるための予約が必要であり、気軽に借りることはできない。入学式などの式典で使用されることが多い。

4. 留学生データ(居住人数、国籍、国費と私費)

寮生内訳(2019 年 12 月 24 日現在)

居住人数 合計 144 名(内 RA5 名 延長生 7 名)

男性 84 名 女性 60 名

年齢 18 歳～31 歳

国籍 合計 22 カ国

インドネシア、モンゴル、台湾の学生が多い。

インドネシア、日本、マレーシア、ブラジル、ウズベキスタン、ベトナム、ルワンダ、セネガル、チュニジア、香港、台湾、カンボジア、タイ、シンガポール、モンゴル、中国、キルギス、ブルネイ、フィリピン、インド、アラブ首長国連邦

国費と私費

留学生が日本で生活するためのお金に関して、東京日本語教育センター事務室の係長に話を伺ったので、それをもとに記述していく。留学生は国費留学生と私費留学生に分けられる。国費は日本政府から給付の奨学金をもらっている留学生で、インタビューでは高専の留学生がそれに当たる。彼らは、日本政府もしくは各高専から依頼を受けて、各国の大使館が実施した試験に合格した留学生のことだ。他にも、国費を受給しながら、日本の大学に通う予定の留学生もいる。また、私費留学生は奨学金を一切受給せず、自費で来日し、勉強する留学生のことを指す。インタビューでは出てこないが、外国政府からの奨学金や日本の民間企業から奨学金を受給して、勉強している留学生もいる。

5. 留学生寮に居住する留学生を取り巻くアクター

留学生寮関わっている人々は留学生以外に、RA(レジデントアシスタント)、延長生、事務室職員、警備員がいる。

RA は筆者を含め 4 月から翌年 3 月まで寮に居住する日本人学生 5 名である。RA

は留学生のサポーター的役割を担っており、業務は多岐に渡る。留学生が渡日する時期にあたる4月、10月は留学生とともに市役所に行き、住民票登録と保険証の受け取りをする。また、RAは1年に1人1回RAイベントというイベントを寮内で開催する。これは事務室から予算がおりるので、予算内で企画を考え、企画書を提出したうえで企画を実施する。これまで、各国の料理をつくって食べる料理パーティー、流しそうめん、クリスマスパーティー、卓球大会、フェアウェルパーティーなどが行われた。さらに、RAは1人月4回ずつRAルームという1階にある相談部屋で19時から21時の2時間にわたって、留学生の相談を受けることが義務付けられている。実際、堅苦しい雰囲気のある部屋ではなく、カードやテレビゲームで遊べ、学生ラウンジのようにイスやソファがあるため、学生が気軽に來て交流できる場にもなっている。RAの業務内容は渡日サポート、RAイベント、RAルームでの相談受けが主である。RAは留学生が渡日後、初めて接する同年代の日本人であり、共に居住する存在である。また、RAも留学生と日常的に交流し、時には生活や日本語のサポートをする。

延長性は、センターを卒業し、現在は大学、大学院や専門学校に行っている学生のことだ。延長生はRAのように、入寮した学生をサポートする役割を担っている。特に業務はないが、住んでいる階で問題を問題が起こった時に、RAと一緒に対処することが多い。また、同じ国出身の留学生にお兄さん・お姉さんの存在として親身になってお世話をする延長生もいる。

事務室職員はJASSOが雇用する職員である。職員は留学生の書類手続きなどの業務を行う。留学生は日常生活で問題が発生したときや荷物の受け取りなど、必要な時に事務室を訪れることはあるが、事務室職員は留学生と日常的な交流はほとんどない。

寮にはシフト制で24時間常駐する警備員がいる。60～80歳あたりの男性4名で構成されており、寮に常に1人はいるようにシフトが組まれている。寮の門が開いている時間は6～23時のため、それに合わせて彼らは寮の門の開閉をする。そして、時折、寮内の見回りをし、夜中に騒いでいる学生がないか、寮内に何か問題が発生していないか確認をする。警備員がいるからこそ、寮生は生活リズムをあまり崩さず、

秩序が保たれた寮生活を過ごすことができるのだ。

第4章 ソーシャル・ネットワークの形成要因

1. 留学生のプロフィール

留学生寮に居住する留学生 11 名を対象に半構造化インタビューを実施し、対象者のプロフィールを以下にまとめた。

名前	性別	年齢	国籍	プログラム
A	女	21	中国	私費・学部受験
B	女	19	中国	私費・学部受験
C	男	19	マレーシア	私費・学部受験
D	男	18	タイ	国費・高専
E	女	19	モンゴル	国費・高専
F	男	24	ブラジル	国費・高専
G	男	24	台湾	私費・大学院受験
H	男	19	ルワンダ	国費・高専
I	女	19	インドネシア	国費・高専
J	女	19	モンゴル	国費・高専
K	男	22	セネガル	私費・学部受験

A

よく喋る性格で、あまり物怖じせず意見を言う。他の中国人と違い、外国人と積極的に関わっている。筆者が日常的に関わる唯一の中国人。

B

A から紹介してもらい知り合った中国人。A に紹介してもらうまで筆者は話したことがなかった。インタビューでは、自分から話すタイプではなく、聞かれたことに答えるおとなしめな印象を受けた。

C

マレーシア人のリーダー的存在で、彼自身も自分はリーダーの特徴を備えていると自

負している。学生ラウンジや RA ルームにも頻繁に顔を出し、様々な人と交流している。歳以上に落ち着いていて、寛容さがある。

D

一言で言うとパーティー好きな留学生。毎週必ず D か K の部屋で友人を誘ってパーティーを開催している。誰にでもフレンドリーに接し、誘いには気軽にのる性格。

E

モンゴル人の中で 1 番外国人と関わりをもっている。好奇心旺盛で、面白いことがすぐに飛びつく。ダンスも好きでノリがいい。

F

1 人で過ごすことが好きで、他の寮生と関わりをほとんどもたず、部屋にすることが多い。争いを好まず、温和な印象がある。

G

RA ルームや学生ラウンジでは見かけない。真面目で素直な性格。自分から話すことはあまりないような印象を受けた。

H

ふざけることが好きで、他の留学生からいじられることが多く、周りから愛される性格。バスケ、パーティー、RA ルームなどに頻繁に参加し、交流に積極的。

I

おとなしい性格で、インドネシア人のコミュニティにすることが多い。仲がいい人と話すときは、よく喋り、楽しく笑う。

J

よく話す性格ではないが、外交的。自分で大学のカルタクラブに参加したり、ホームステイに参加したりするなど、行動力がある。

K

寮内で 1 番の人気者。フレンドリーで親しみがもてる。相手に興味をもって自分から話しかける。おおらかで、少しいい加減なところもある。

インタビューは以下の質問を尋ね、深堀りしたい点は続けて質問した。インタビューのはじめには、自分が所属している寮内のコミュニティを書いてもらい、親密度が高い順に番号をつけてもらった。その後、仲のよい 10 人の名前を書いてもらった。

次節以降では、留学生のインタビューと筆者の参与観察をもとに、ソーシャル・ネットワーク形成に影響する要因をカテゴリーごとに分類して記述していく。

インタビュー質問項目

- ・なぜ日本を選んだのか？ 日本に来るまでのプロセス。
- ・日本での生活を平日、休日に分けて教えてほしい。何時ごろに何をするか。
- ・寮で人と交流する場所。何をするか。・何を考えながらコミュニティに番号をつけていったか。1 番と 2 番の違い。
- ・どうやってコミュニティはできていったか。きっかけ、時期など。
- ・リストにあげた 10 人はなぜ挙げたのか。なぜ仲がいいのか。
- ・外国人と交流するときに気をつけていることはあるか。

2. 親密な友人・コミュニティとは何か

留学生がソーシャル・ネットワークを形成するなかで、他の留学生に抱く親密度は異なる。親密度を抱く時に重要な要素は何か。筆者はインタビューを実施するなかで、留学生に親密度の高いコミュニティ順に順位をつけてもらい、特に仲のいい友人を 10 名挙げてもらった。そして、親密度の高い理由も尋ねた。そうすることで、留学生が親密さを感じる人とそうでない人は何が異なるのか調査をした。

親密さを感じる 1 つの要素は、重要でないことや冗談を言える関係かということだ。H にとって仲のいい友人はお互いが冗談を言い合える関係を指す。例えば、ある日、H は寮で友人数名とゲイに関するニュースショーを YouTube 見ていた。それはコメンテーターが、ゲイ活動家の黒人に対して最初に「Who is gay?」と直接質問するなど直接的な意見を言う番組だった。また、YouTube の編集もコメディ寄りだったため、傍から見るとセンシティブとおかしさが同居するような内容だった。視聴後、友人数名が H に対して「Who is gay?」を連発し、からかっていた。普通だと、

ゲイと黒人というセンシティブな言葉が話題にあがっており、お互いに話すのを避けたくなるような話題だ。しかし、Hの友人はHと親密な関係であるため、気にすることなくHと会うたびに、挨拶のように「Who is gay?」と話かけていた。これは通常なら、相手を傷つける言動になりかねない。しかし、Hとその友人は信頼関係を築けているからこそ、センシティブな内容も冗談に変え、お互いに楽しむことができるのだ。

他にも、マレーシアのCはコミュニティの順位をつけていくときに、1番にマレーシア人グループを選んだ。その基準は「ひどいことを言ったら誰が1番許してくれる人。」だった。例えば「お前の母さんはデブとか。そういう、冗談。」のことを指す。Cにとっても親密度が高い友人は悪口のような冗談を言っても、相手にそれが許容されることだった。

また、筆者とCも冗談を通じて親密な関係を築いた。その鍵を握るのは下ネタだった。

筆者:この中(親密度が高い10名)で例えば仲良くなっていった人いる?最初微妙だったけど、だんだん仲良くなっていった人って。

C:かい(筆者)かな。君が変態ということを知る前はちょっと固かった。やっぱり恥ずかしかった下ネタとか。で、それが知ったらそれがうまくいく。

筆者:最初話しづらかったみたいな。

C:うーんそうよね。最初は僕は最初のとき沖縄の話とか大学の話とか。それは何か固い感じだったでしょ。5月、6月とか。でもその後は話しやすくなっちゃった。

筆者:何がきっかけで話しやすくなったの?

C:やっぱり下ネタ。本当に。それは確かみたいな感じだからさ。

筆者:下ネタがもつ力って何だと思う?

C:男の人の共通点みたいなやつ。

Cが述べたように筆者ははじめCと当たり障りのない会話しかしていなかった。

ある日、RA ルームで筆者を含め C もいたときに下ネタを含んだ会話になったことがあった。そこで、私は日本語の練習と思い、授業で先生が絶対に教えてくれないであろう卑猥な日本語をそこにいる留学生に説明した。そうすると、留学生は興味ありげに私の話に耳を傾け、楽しそうに笑ってくれた。筆者と C が下ネタを通じて仲良くなっていったのはそこからだったと思う。それから私が RA ルームにいるときは、時折話の流れで話題が下ネタになることがあった。筆者はそれ以来、仲がいい留学生に会うたびに「HENTAI」と気軽に呼ばれるようになった。また、下ネタは世界共通の言語であるということも確信した。音楽、スポーツ、恋愛に近いものがあるのかもしれない。人間がもつ共通の部位や気持ちを話題にする。下ネタは留学生同士を結びつけ、お互いをさらけ出せるような話題でもあると思う。このようにお互いが冗談を言い合い、下ネタのように話づらいことでも話せる。C は下ネタがきっかけで筆者と親密な関係を築いた。C にとって、恥ずかしげもなく、下ネタのような話題が話せる関係が親密度の高い友人・コミュニティなのだ。

また、親密さを感じるのは冗談を言えるかだけではない。A にとっては自分の気持ちをどれだけ話せるかが親密さの基準になっている。A は 10 月中旬ごろから RA の L と付き合い始め、その L が A にとって、付き合った後は 1 番親密度の高い存在になっている。彼にだけは、「自分の気持ちかな。もっと深い気持ち。」を話せる。A は日本の大学入学を目指して、日々勉強をしていた。彼女の周りには同じように大学合格を目指している友人が数名おり、大学受験に関しては何でも話せるはずであるが、A は友人よりも彼氏のほうが話しやすい。例えば、大学を不合格になったときに、A は友人には、「別の学校があるから、まだ大丈夫」と伝えていたが、内心は悔しかった。A はその悔しい気持ちを L には伝えた。A にとって L は本心を伝えることができる唯一の相手になっている。また、A の志望校の 1 つが L が通っている大学であるため、受験や進学の相談を A は L に相談することができた。自分の進路という大事な問題を L に相談できたことが、A が L に本心を打ち明ける関係になった 1 つの要因とも言える。また、お互いが話す母語は日本語と中国語と異なっているが、A はわからない日本語は調べて、言いたいことはできるだけ L に伝わるように努力して

いる。A にとって言語は大した問題ではなく、接している相手が本心を言える存在であるかが重要なのだ。そのため A にとっては本心を打ち明けられる相手ほど親密度が高いという基準になっている。

親密さの基準として3つ目に挙げたのは、自然体、自分らしくいられるかだった。モンゴルの J は他の留学生と異なり、親密度が高いコミュニティを 1. 彼氏、2. RA ルーム、2. インドネシア人、3. モンゴル人の順番で挙げた。他の留学生ならほとんどが同国の留学生コミュニティを1番目か2番目に親密度の高いコミュニティとして挙げる。J がモンゴル人コミュニティを3番目に位置づけるのには、自然体、自分らしくいられるかが関わっている。

J は留学当初、モンゴル人と仲良くなろうと頑張っていた。自分から話かけたり、コミュニティの輪に参加したりしていた。しかし、ある出来事がきっかけで、そのコミュニティから離れていった。J には日本人の彼氏がいて、現在北海道の高専で勉強している。彼氏とは彼氏が高校生の時にあるプログラムでモンゴルに来た時に知り合った。寮生活のある日、その彼氏が寮に遊びに来る日とモンゴルのお祝いの日が同じだったので、J はモンゴルの料理パーティーに彼氏も一緒に参加してほしいと思った。そこで J は、寮に住むモンゴル人の LINE グループで彼氏をパーティーに参加させてもいいかと尋ねたのだが、誰からも返信がなかった。本当は、その時パーティーの準備でみんな忙しく、返信できなかったとあとになって J は知ったのだが、J は彼氏はモンゴル人から歓迎されていないと思い、自分はモンゴル人から嫌われてしまった。それが1つのきっかけとなり、J が寮のモンゴル人コミュニティから離れていくことになったのだ。インタビュー中、J は「何で頑張っているのに、何も悪いことしていないのに仲良くなれてないんだろうってずっと考えてて。」と私に寂しそうに話した。

モンゴル人コミュニティと距離を置いて、そこから J は人と仲良くなるために、頑張り過ぎるのを辞めた。その後、「私は外交的で、人に話すことによって元氣を得られる人」という性格もあり、持ち前の社交的な性格を発揮して、J は学生ラウンジにいたインドネシア人コミュニティや RA ルームに顔を出すようになり、そこにいる人

達と関係を築くようになった。Jは5月頃、RA ルームを初めて訪れた。そのとき、彼氏との電話でしか人と話す機会はなく、寮生とほとんど会話をしていなかった。寂しさも募り、人と話たくなかった時に RA ルームに顔を出すようになった。モンゴル人と仲良くなれず、自分がだめだと自分を責めていたが、RA ルームにいる人達と話すと頑張らなくても自然と仲良くなれることに気がついた。RA ルームでは J は話に気をつかわず、自分らしく話すことができた。そして、Jはこの経験から友達をつくる時に無理しないほうがいいことを学ぶ。Jにとって自分が自然体で気をつかわずにいれる人と一緒にいることが友達をつくる秘訣だという。これは、Jにとって「自分の居場所探し」と言えるだろう。初め、Jはモンゴル人コミュニティに参加し、友人関係を構築しようと頑張った。しかし、それが難しいとわかると、別の「居場所」を求めて RA ルームにきた。RA ルームでは、自分らしく自然体でいるなかで、友人関係を構築することができた。RA ルームは Jにとって「居場所」になったのだ。つまり、Jにとっては自然体で自分らしくいられ、「居場所」を感じることができるコミュニティが親密度の基準になっている。これは範が述べていた「居場所は個人が安心して自己を認められる空間」であることにも関連している。

友人との親密度を測る基準として、留学生からは冗談を言えること、本心で話せること、自然体で自分らしくいられることが挙げられた。この3つはどれも密接に関係しているように思える。例えば、冗談を言えることが自分らしくいられることにつながる。また、自分らしくいられることが本心で話せることにつながる。留学生それぞれが親密度を測る基準は異なるけれども、言葉は違うだけで傾向は似ている。

3. 留学生が集う場と活動

ソーシャル・ネットワーク形成に場所や活動は欠かせない。寮内の場所や活動に留学生が集まり、交流していくことで留学生同士のソーシャル・ネットワークが形成されていく。インタビューでは、RA ルーム、バスケットボールコート、ロビー、パーティー、空手が挙げられた。

(1)RA ルーム

RA ルームは、RA が開ける相談部屋で、留学生の日常生活における問題の解決や日本語のサポートなどをする。しかし、実態はそれだけではなく、UNO、トランプ、テレビゲームなど遊び道具もそろっているため、留学生が気軽に立ち寄って交流する場として機能している。

留学生が RA ルームに来る理由は様々だ。1 つ目の理由は、日本語の練習のために RA ルームを訪れることだ。例えば、ルワンダ出身の H は日本語を全く勉強せず、来日した。そのため、はじめは RA や留学生とほとんど会話をすることがなかった。筆者と同じ 1 階に居住しているが、筆者は H と最初の数カ月は廊下ですれ違い、目があったら、挨拶をする程度だった。H の母語はルワンダ語で、ルワンダの学校で英語を学んでいたが、ルワンダでは使用機会が無かったため、日本に来てから使い始めた。つまり、自分が使用できる言語で誰とも会話ができない状態で来日したことになる。H は 9,10 月頃から RA ルームに来るようになり、そのあたりから、筆者とも日常会話程度の日本語は話せるようになっていた。日本語を最低限身につけてから H は RA ルームを訪れるようになったのだ。RA ルームでは、留学生が会話する時の言語は英語か日本語だ。さらに、RA ルームを訪れる留学生のほとんどが、日本語が日常会話以上かつどの留学生とも気軽に交流できる社交性を身につけている。そのため H は普段、周囲からからかわれるくらい親しみをもたれ、多くのコミュニティ参加している社交的な性格であるが、日本語のレベルが原因で RA ルームに来ることができなかった。最低限の日本語を身につけたうえで H は RA ルームを訪れ、日本語の練習と他の人と交流するために H は RA ルームを訪れているのだ。

また、セネガル出身の K も来日当初、RA ルームを訪れる留学生の日本語レベルが高すぎて、RA ルームを訪れることはできなかった。K は来日前はひらがなとカタカナの読み書きぐらいしかできなかったが、日本語が上達するにつれて、RA と会話することができ、RA ルームに来ることができるようになった。M は寮生なら誰もが顔を知ってるほど、誰とも仲良くできる社交性を備えている。しかし、H と同様に、日本語が原因で留学当初は RA ルームに来れなかった。

つまり、RA ルームは RA が主体となって設けている場であるため、RA ルームは RA がいる場所→日本人→日本語を使う場という認識が留学生の間にあることが推測される。また、正宗が寮生活の研究でも指摘しているように、日本語力が一定水準ある留学生は、RA ルームを利用しやすいため、人間関係のネットワークも広がりやすくなる。

RA ルームを訪れる 2 つ目の理由として挙げたのが、他の留学生と交流することだ。マレーシアの C は外交的な性格であり、寮の中では人気者的存在だ。彼は他の人と話すのが好きで、1 人であることの寂しさもあったため、RA ルームを訪れ始めた。「ここ(RA ルーム)は居心地の場所になっている。」という発言にあるように、C にとって RA ルームは自分が安心して過ごせる快適な場所になっている。例えば、C は RA ルームにあるギターでゆったりとしたテンポの音楽を弾きながら、リラックスして、RA ルームの空間を楽しむ。

RA ルームは留学生が交流できる場となっているが、メンバーの固定化が生じている。インタビュー対象者のなかでは、C、D、E、H、K が RA ルームによく来る留学生だ。入寮して時間がたつと、特に用事がない限りは彼らと他の留学生数名を除いて、留学生は来ない。このように、RA ルームに来る留学生は限られてくるため、留学生の流動性は低くなっている。

日本語の練習をしたい、誰かと話したいなど様々な理由で留学生は RA ルームを訪れる。ただし、そこには日常会話程度の日本語力と誰とでも話せる社交性が見えないフィルターとしてかかっている。RA ルームはその 2 つの条件を満たした留学生が訪れ、交流する場所となっているのだ。

(2) パーティー

パーティーは D か K の部屋で主に金曜日に開催されるイベントである。そこで、留学生はゲームをしたり、話をしたりする。パーティーはセネガルの K とタイの D が主催者となり開催される。D、K はどちらも寮生の中で人気者で、ほとんどの人と気軽に交流ができる。そして、仲がいい人たちを自分たちのパーティーに招待する。

パーティーは何時から何時までと決まっているわけではなく、ときには朝 5、6 時まで開催していることもある。パーティーは誰でも参加可能であるが、基本的に D か K、パーティーによく参加している人やその友人でメンバーは構成されている。そして、パーティーに関してもパーティーに抵抗がない、外交的、主催者の 2 人と仲がよいという条件を満たした人がパーティーメンバーになっている。パーティーも RA ルームのようにフィルターがかかっているのだ。例えば、中国人の A は主催者の D、K と仲がいたため、友人からの誘いならということで、パーティーに参加した。ただ、パーティー自体はそこまで好きではないため、これまでに 2、3 回しか参加していない。A もパーティーに抵抗がない、外交的、主催者の 2 人と仲がいいという条件を満たしている。

パーティーの 1 つのメリットとしてソーシャル・ネットワークの広がりがある。筆者もパーティーに数回参加したことがあり、そこで初めて会話をし、友人関係を築いた留学生もいる。また、A は RA の L と付き合っており、L と初めて知り合ったのはパーティーだった。パーティーをきっかけとして仲良くなり、付き合うようになった。パーティーという場がなければ、2 人は話す機会がなかった可能性もある。パーティーは一定のフィルターがかかってはいるものの、今まで知り合うことのなかった人と知り合うことができる場なのだ。

(3) クラブ、バスケットボールコート

クラブは学校が運営している活動で、空手と柔道がある。例えば、空手は週 2 回放課後に行われ、学校で勉強している留学生なら誰でも参加できる。H は空手に定期的に参加している。ただ、彼は空手を学ぶためにクラブに参加しているのではなく、友人をつくるために参加している。H はクラブを友人をつくる機会と捉えているのだ。

また、別の交流場所としてバスケットボールコートがある。コートは寮の敷地内にあり、誰でも自由に使用できる。放課後になるとほぼ毎日誰かが使用している。決まった活動というのではなく、放課後になると数名の留学生がバスケットコートを使い始め、それを見た他の留学生が自由に参加している。K と H もよくバスケットをしてお

り、そこで友人をつくった。友人であるが、バスケ限りの友人である。例えば、Hはバスケをしてモンゴル人と仲良くなったが、それ以外では彼らとコミュニケーションをとっていない。あくまで、コートでは、バスケットをすることがメインであり、より深い友人関係に発展することはあまり無い。実際、インタビューで、バスケットコミュニティが挙げたが、他のコミュニティと比較して親密度は低かった。また、バスケットができない女性もバスケットに参加することがある。そのため、バスケットボールコートは誰にでも開かれており、気軽に交流できる場になっている。

クラブ、バスケットボールは、他の留学生と活動を通じて仲良くなれるが、そこでは何かしらの活動がメインとなっており、友人をつくっても親密度は高くない傾向がある。

(4)学生ラウンジ

留学生はここで勉強をしたり、話をしたり、遊んだりする。遊ぶ内容は様々だ。UNO やトランプなどのカードゲーム、設置されているテレビを利用したゲームや映画鑑賞などがある。ラウンジは特定のコミュニティが出来上がった状態で、何かをしていることが多いので他の留学生がそのコミュニティに途中から参加することは難しい。例えば、インドネシア人はよく学生ラウンジで勉強したり、話をしたりしている。すでにコミュニティとして出来上がっているため、他の留学生が参加することは難しい。そう考えると、学生ラウンジはソーシャル・ネットワークを広げる場ではなく、今自分が所属しているコミュニティとのつながりを強める場という役割が強い。

(5)RA イベント

RA5 名がそれぞれ年に 1 回、合計 5 回開催する寮のイベントである。イベントの予算は事務室から支払われるため、RA は予算の範囲内で自分たちでイベントを考え、企画書を作成する。2019 年度は、ウェルカムパーティー、流しそうめん、クリスマスパーティー、卓球大会、フェアウェルパーティーを実施する。イベントによって人数は異なるが、毎回 20 名以上を超える留学生が参加する。留学生からは評判もよく、「もっと RA イベントをやってほしい」、「次の RA イベントはいつやる

の？」という声も聞く。留学生にとって、RA イベントは非日常の体験であり、他の留学生と交流する機会でもある。筆者が4月に開催したウェルカムパーティーでは、各国の料理を留学生につくってもらい、それを他の留学生に紹介し、ビュッフェ形式で食べるという内容のイベントを実施した。モンゴル、インドネシア、ベトナム、マレーシア、タイ、台湾、中国の留学生に料理をつくってもらい、40名以上が参加した。そのイベントは自由にテーブルに座って食べることができたため、同じ国同士のコミュニティで固まり、他の留学生と関わる機会はあまりなかった。反対に、8月に開催した流しそうめんでは、流しそうめんを流す竹のセットを参加者全員で組み立てたので、知り合いではなかった留学生同士がイベントを通じて関係を構築する場面も多かった。さらに、12月に開催したクリスマスパーティーでは、留学生を4つのチームにわけて、ジェスチャーゲームを行った。これは順番に各チームから1人ずつ前に出て、RAが考えたお題に沿ったものまねをしてもらい、各チームにあててもらうゲームだ。これは、チーム対抗のゲームのため、チームメンバーと話し合う機会が多くなった。また、ランダムでチームを決めたので、今まで知り合うことがなかった留学生と知り合う機会になった。

RA イベントは留学生同士の交流を目的として実施される。筆者が開催したイベントでは、結局、仲がいい留学生同士で固まってしまっていたため、目的が達成されたとは言い難い。しかし、流しそうめんとクリスマスパーティーでは、今まで知り合うことのできなかった留学生と知り合う機会があった。それは、RA側が意図して、留学生同士を交流する「仕掛け」をつくったからだろう。流しそうめんだと、流しそうめんセットをつくる作業、クリスマスパーティーだと、チーム対抗のジェスチャーゲームがそれに当たる。「仕掛け」が作用したことで、留学生同士はソーシャル・ネットワークを広げることができたのだ。そのため、RA イベントは留学生同士の交流を測ることを目的としたものであるが、その目的が達成されるかどうかはRAの裁量に依るところが大きい。

(6) キッチン・廊下

キッチンは各階に1つずつあり、各階の留学生が共用で使用している。キッチン

では、作っている料理の話など短めの会話が交わされることが多い。簡単な挨拶程度の会話で終わるため、キッチンで長時間交流し、親密度が高まることはあまりない。廊下も同様だ。廊下ですれ違くと留学生同士は挨拶を交わすが、それぞれの目的のために歩いているので、ソーシャル・ネットワーク形成には結びつかない。しかし、Hはキッチンや廊下を利用して、ソーシャル・ネットワークを広げていった。キッチンや廊下で会った時に軽くおはようと挨拶をする。また、キッチンで誰かが料理をしている時に、「何作ってるの?」「美味しそう。」とHは積極的に話しかけた。その結果、徐々に同じ1階の留学生と打ち解け、関係を築くようになった。Hの例は稀で、たいてい、留学生はキッチンや廊下で挨拶程度しかしないため、他の留学生との会話はあまりない。ただ、Hのように、自分の関わり方次第で、キッチンや廊下をソーシャル・ネットワーク構築の場に変えることができるのだ。

山川の研究にもあるように、共有スペースがあることで、ソーシャル・ネットワークはより広がっていく。東京日本語教育センターの寮でも、多くの共有スペースが存在し、留学生がそれを活用していくことで、ソーシャル・ネットワークが広がっていった。

4. 4つの共有

自分と相手の間で何かを共有することで、ソーシャル・ネットワークの形成が促進されることがある。

1つは自分と相手の情報を共有することだ。自分のことを相手に話し、また、相手も相手のことを話すことで、ソーシャル・ネットワークが形成されていく。DとKが開催するパーティーを例にとってみる。Jはパーティーを通じて他の留学生と仲良くなれたと述べていた。その理由はパーティー参加者がお互いの秘密がなくなるくらいに様々な話をしたからだ。パーティーで遊ぶゲームは個人の秘密を質問するゲームもあり、ゲームを通じて、Jはパーティーメンバーのことをよく知るようになった。そして、ゲームが終わると、深夜からみんなが自由に様々なことを話し始める。その2つをしていくなかで、Jはパーティーメンバーと仲を深めていった。

また、主催者の D は 1 番親密度が高いコミュニティとしてパーティーを選んでいる。その理由の 1 つとしてパーティーでよく話すことを挙げている。

パーティーはずっと話してたでしょ。もっと知るようになって、仲良くなってあーこの人の本心とか性格とか知っててまあそんな感じみたい。まあ何か友達になったような。

と言うように、長く話すことでお互いの素の部分を知るようになる。それが信頼を生み、親密度が高まることにつながる。そして、パーティーで話す内容は普段、人に言わないような自分の経験や個人情報が中心になっている。これは J が述べていた秘密とも言い換えられる。留学生は長時間話すだけでなく、より個人的な部分までお互いのことを開示し、共有することで親密度を高めているのだ。

また、K はコミュニティに順位をつけるときに、話やすさと付き合ってる時間の長さを判断基準にした。K は誰にでもフレンドリーに接し、親しみやすいが、人によっては話したくないこともある。その話したくないことでも、話せることが K にとっては話しやすさにつながっている。パーティーでは、最近気になっている人、どうやってあの人を誘えばいいかなど恋愛の話も多くする。相手が自分のことを開示することで、自分のことも話しやすくなると K は言う。話した結果、お互いよく知ようになり、信頼関係も構築される。K は相手が自己開示をすることで安心感を覚え、自分の自己開示をする。K も情報を共有することでソーシャル・ネットワークを形成していく。

情報共有以外には、感情の共有がある。喜怒哀楽の感情を他人と共有することで、ソーシャル・ネットワークが形成されていく。中国人の B にとって 1 番親密度が高いコミュニティは寮に住む中国人の友人たちだ。B は友人たちとお互いに悲しみや怒りの感情を吐露することができ、友人たちは B を幸せな気持ちにさせてくれる。中国人の友人は B にとってお互い助け合える寮内の 1 番のコミュニティなのだ。例えば、B の元彼氏は同じ寮に住んでおり、まだ恋人関係が続いていたある夜の 22 時頃、元彼氏は B の部屋をノックしてきた。その時、B は元彼氏とあまり関係がうま

くいっておらず、元彼氏のことを嫌いになっていた。彼がノックしたとき、Bは不安に駆られ、ひどいことをされるのではないかと思い、友人に助けを求めた。Bから連絡を受けた友人はすぐに警察に電話し、Bを助けるために最善を尽くした。そして、友人の助けのおかげで元彼氏は部屋の前から立ち去ったが、Bは恐ろしさのあまり、泣き出してしまった。それを見た友人は彼女を抱きしめ、「助けが必要なときはいつでも呼んでね。」と伝えた。彼女が吐き出した感情を友人は受け止め、それによって彼女は友人に安心感を覚え、守られていると実感した。Bは友人と窮地に陥った状態の感情を共有することによって友人関係がさらに深まったのだ。

他の共有には活動の共有がある。これは前節で挙げた活動やRAイベントにも共通する。留学生同士で何かの活動をとにもおこなっていくことで、ソーシャル・ネットワークが形成されていく。留学生のなかでとりわけインドネシア人コミュニティは仲がよく、いつも学生ラウンジに誰かがいて勉強をしたり、話をしたりしている。Iはインドネシア人のコミュニティを自分にとって1番親密度が高いと言う。親密度が高い理由の1つは、様々な活動をとにもするからだ。そのコミュニティで11月には高尾山に登ったり、1月には長野旅行に行った。さらに月に1回はそのコミュニティでご飯をつくり、一緒に食べる。そして、卒業記念としてオンラインフォトアルバムをつくるために役割分担をして、プロジェクトを進めている。これほどまでにまとまって頻繁に顔を合わせ、多くの活動を共にしているコミュニティは、筆者が知る限り寮内には存在しない。多くのイベント・プロジェクトをとにも企画し、活動していることも影響して、Iにとってインドネシア人コミュニティは親密度が高い存在なのかもしれない。

共有には時間の共有もある。他の留学生と共に過ごす時間が長いと親密度が高くなりやすいという傾向だ。Cはコミュニティに順位をつけるときに話しやすさと付き合ってる時間を基準にした。これは付き合う時間が長いほど、Cにとっては親密度が高くなるということを示唆している。また、インタビュー中に、Eは過ごす時間と仲良さは関係があると指摘している。筆者も寮生活のなかで、時間を過ごす時間が長い留学生ほど親密度が高い。RAルームを開いた時に来る留学生とは、ともに過ごす時間

が長くなるので親密度が高くなっている。また、そこでは、時間をただ一緒に過ごすのではなく、情報、活動、感情の共有を伴った時間の過ごし方が必要になってくるだろう。

共有には情報、活動、感情、時間があった。これらの共有要素は山川の「相手との時間的・空間的共有が友人関係構築を促進する」という指摘とも一致する。4つはそれぞれ独立しているものではなく、入り混じって他者との共有が行われている。例えば、誰かと話して笑っているときは、話す内容は情報、話していることは活動、笑っていることは感情にあたる。様々な要素を共有していくなかで、留学生は他者とソーシャル・ネットワークを形成している。そして、インタビューの発言や寮生の観察から、4つの共有を含む活動が多くなるほど、関わっている相手との親密度が高まっていくと推測できる。

5. 性格

ソーシャル・ネットワーク形成には留学生の性格、相手との相性も関係してくる。Cは寮に14名いるマレーシア人のなかでも1番外交的で他国の留学生の友人も多い。また、RAルームも頻繁に訪れている。そこまで積極的に人と関わるのは、彼の性格が理由の1つにある。Cは昔から人と話すことが好きで、知らない人と話すアプリを使って人と話すこともある。もともと外交的な性格なので、他人に自分から話しかけて関係を形成することができている。

また、Jも昔から外交的だった。3歳の幼稚園時代、幼稚園の先生が「誰か自分のストーリーを話してくれる人いませんか」と聞いた時に、Jはみんなの前に出て自分についての長いストーリーを話した。そして、小学校から中学2年生にかけては、Jの外交性はピークに達し、中3で学校が変わった時に落ち着いた。Jの外向性は今も続き、学外にある大学のカルタサークルに、外国人はJだけにも関わらず、毎週1回は参加している。このように、CやJは昔から外交的な性格だった。そして、寮生活でも他の留学生と比べて外交的で、多くのコミュニティに所属している。つまり、外交的な性格だと、ソーシャル・ネットワーク形成に長けている傾向がある。

また、外交的な性格に関連して、自分で他人と関わる機会をつくろうとする性格かどうかソーシャル・ネットワーク形成に影響する。例えば、G は友達に関して、

筆者:他の人ともっと友達になりたいとかはない?

G:あーなりたい。例えば、あの寮みんなと一緒に RA のイベントとか。例えば、夏休みの流しそうめん私も参加した。日本の文化。

筆者:あんまり他の人たちとは話したりはしない?この人たち以外とは。

G:きっかけがない。機会がない。やはりみんなの自分の国の人と一緒に。

と述べており、他国の留学生と関わりたいという気持ちはもっているが、RA イベントのように交流する機会がないと自分からは他国の留学生とは関わっていない。同様に、I も機会があれば他国の留学生と関わりたいが、その機会がなければ特に交流する気は無いと言う。一方、C や J は関わりたい人がいれば自分から機会をつくって話しかけている。

4 人とも他国の留学生と関わりたいという気持ちは持っている。C や J はもともと性格もあって、自分から他人と関わる機会をつくろうとする積極性を有している。一方で、G や I は留学生と交流する機会があればそれに飛び込み、他国の留学生と関わるという受動的な積極性を備えていると言える。

また、そこまで外交的ではない留学生に起こっている現象の 1 つは緊張だ。I は C や J に比べると外交的ではない。インドネシア人と遊ぶことが多く、部屋にいる時間も多し。I にとってインドネシア人以外に親密度が高い留学生は、D とモンゴル人の M がいる。I はこの 2 人と話すときは緊張しないようだ。I の緊張とは、何について相手と話せばいいのかずっと考えている状態のことだ。I はクラスメイトとももっと仲良くしたいそうだが、緊張するためあまり話せない。友達を増やしたいという思いはあるのだが、インドネシア人以外と話すときは緊張するため、友人関係がある留学生は C や J に比較すると限定されている。

留学生の中にはほとんどソーシャル・ネットワークをもたない人もいる。ブラジル出身の F はコミュニティを学校のクラスとブラジル人コミュニティしかもっていない

い。日本における友人も 5 名しか挙げなかった。F が挙げたブラジル人は寮には住んでいないので、F が寮で所属しているコミュニティはクラスのみとなる。F は寮のどの学生とも交流をもたず、基本的に 1 人でアニメを観たり、3D モデリングをしたりして過ごしている。F は筆者と同じ 1 階に住んでいるが、廊下ですれ違って挨拶をする程度で、それ以外の会話はほとんどない。F はブラジルにいたときも 1 人が多かった。F は友人がいないことを特に気にかけるわけでもなく、1 人で楽しく時間を過ごしている。F にとって、1 番安心できるコミュニティは好きなように時間を過ごすことができる自分の部屋なのだ。

このように、ソーシャル・ネットワークの形成には性格も影響している。C や J のように人と関わるのが好きな性格なら、自分から他の留学生に話しかけ、ソーシャル・ネットワークを広げていく。反対に、F のように 1 人で過ごすことを好む性格なら、ソーシャル・ネットワークの広がりは限られてくる。そして、その中間に位置するのは G や I のように、通常は同国人のコミュニティ内で時間を過ごすことが多いが、他国の留学生との交流機会があればそこに参加し、ソーシャル・ネットワークを広げる受動的な積極性を備えている留学生だ。性格によって、留学生のソーシャル・ネットワークの広がり様々である。そして、留学生は自分の性格にもとづいて、無理をせず、ソーシャル・ネットワークを形成している。

6. 類似性

相手と似ている部分があることで親しみを感じ、ソーシャル・ネットワークを形成しやすいことがある。I にとって 1 番親密度が高い人は、同じインドネシア出身の E だ。I によると、N は話しやすく、よく I のことを理解しているそうだ。例えば、インドネシア人のなかである問題について話す時に、I は N と同じ意見になることが多く、その時に I は E と似ていると感じ、親しみを覚えた。

また、I にとって寮に住むインドネシア人は母国にいる友人より親密度が高い存在になっている。その理由もタイプが似ているからだ。I によると、インドネシアでは、宗教のことについて冗談を言うことを嫌う人が多い。しかし、寮に住むインドネ

シア人は宗教に関する冗談を言っても、笑って済ませ、寛容な人が多い。例えば、イスラム教のインドネシア人がキリスト教のインドネシア人にキリスト教の冗談を言う。その逆もある。寮に住むインドネシア人は宗教に対してセンシティブな人があまりいないため、宗教に対する考え方が似ている。Iはそれを1つの例として寮のインドネシア人はみんなタイプが似ていると指摘する。考え方が類似しているので、Iは母国にいるインドネシア人の友人よりも寮のインドネシア人に親しみを感じている。

類似性に関して、Cは親密度が高い人たちに共通していることは似ている問題を持っていることだと言う。

何か一緒の問題を持ってるから。一緒にその問題わかってくれるから。一緒にその問題を解決するかな。似てる問題を持ってるから。だから、解決方法を一緒に考えてやるかな。

Cは親密度が高い留学生とは、類似の問題をもち、それに向けて解決策を一緒に考えていくので、親しみを感じている。

また、AがRAと付き合った理由の1つにも類似性が挙げられている。Aは彼氏が日本人というのはそれほど気にせずに付き合った。Aはそれよりも類似性を重視する。

世界観、価値観、人生観は似てる方がいいじゃん。価値観同じなら話しやすい。もしいろいろなものについての視点が違うなら毎日けんかするじゃん。

Aにとって付き合う相手は自分と似た価値観をもっている方がいいのだ。そのため、Aは自分と似た価値観をもっているRAのLに親しみを感じたということもあり、付き合うようになった。

3名とも自分との類似性を接する相手やコミュニティに対して感じているので、その相手やコミュニティと関係を築きやすくなっている。また、3人とも考えや価値観

と言った個人的な深い部分に関する類似性が相手やコミュニティにあることで、親密なソーシャル・ネットワークを築くことができている。

7. 相手への関心をもつ

相手に関心を向けることもソーシャル・ネットワーク形成に大切な要素だ。Kは2017年10月から寮に住み始めている。学校は卒業したが、現在は延長生という立場で寮に住んでいる。2017年10月から2018年3月までは同国のセネガル人が彼を除いて5名住んでいたのもので、セネガル人と関わるが多かった。しかし、友人たちが寮を卒業したため、2018年4月から寮に住むセネガル人は彼1人になった。その時から、彼は今まで以上に他国の留学生に自分から積極的に話かけるようになった。その動機には友人をつくりたいという思いと彼が寮生活で感じていた違和感がある。

セネガルでは、すれ違った人であれば、知り合いでなくとも挨拶をするのが当たり前だ。しかし、寮では廊下で他の留学生とすれ違って、Kが挨拶をしようとしても、すれ違った人は目を合わせることもせず、挨拶をしないことがほとんどだった。彼はその状況に違和感を覚え、その違和感を払拭するために、セネガルにいたときと同じように、廊下ですれ違った人に挨拶をするようになった。それは同国の友人が卒業し、新入生が入学する時期だったので、新しい関係を構築できるタイミングだったということも関係している。同国人の卒業、文化の違いに対する違和感という理由から、Fは以前にも増して他国の留学生に関心に向けて、関わりをもつようになった。

俺が知りたいと思って、相手も知りたいと思ってくれたんじゃない。だから、そこから話して次の日も会って、挨拶して「今日元気ですか？」「日本はどうです話とか？」「もう授業始まったんですか？」「授業始まってどうなんですか？」色んな会話とか。

このように、Kは新入生に関心をもち、積極的に話しかけていくことで、友人の輪を広げていった。そのような積極的な行動もあり、現在寮生のほとんどが彼を知って

いるくらいに彼は人気者になっている。Kは他の留学生と廊下ですれ違う時の挨拶から始め、徐々に会話を深め、ソーシャル・ネットワークを広げていった。

また、Eは友人グループをつくっていくときに、何が大事かという問いに対して、「今思ったら相手もこっちもこの人の考え方もっと知りたいなと思ったら友達ができるんじゃない。」と答えている。これも相手への関心に結びつく。EもKのように1つのコミュニティに留まらず、自分から留学生に話しかけて、友人の輪を広げている。Eはモンゴル人の中で1番、他の留学生と関わっており、様々なコミュニティを横断している。筆者もEと話す時に、話していて楽しいという実感がある。Eは相手の目を見て、筆者の話をしている、興味があるということがEの聞く態度や話し方から伝わってくる。Eは相手に関心を持って接するということが身に染み付いており、E自身もそれを自覚して行動しているので、周囲から好かれて友人も多いのかもしれない。

また、Jは親密度が高い10名を選んだと理由として、よく話を聞いてくれることを指摘した。Jは自分だけ話して相手の話を聞かない人は嫌いと言っていた。Jと仲がいいインドネシアのOはJのように外交的な性格であるが、相手の話をよく聞く。同様にJも外交的な性格であるが、自分だけ話すのではなく、相手の話にも耳を傾けている印象をもつ。そして、Jによると、相手が自分の話を聞いているかは態度でわかるそうだ。自分は相手の話を聞いているつもりでも、相手からするとそうではないことがある。素直に相手の話に耳を傾けようとすることが大切だとJの話は示唆している。

相手に関心を向け、相手からも関心を向けられることは、花木らが日本人留学生がアメリカでルームメイトと良好な関係を築き続けるためには、双方が相手に興味を持ち続けることが必要であるという指摘に当てはまる。Jが相手の話に耳を傾けるのは、相手に関心をもっているという態度の表れでもある。そのため、OとJはお互いの関係を持続させることができているのだ。

また、Aは違う視点から相手への関心を述べている。Aは他の中国人に比べて外国人との関わりが多い。

いやあの人はムスリムとか他の国の人はどうでもいい。まずは人間にとってこの人はどう思う。もし好きなら友達になります。あとはこの国の習慣。友達になりたいなら一応国の習慣は知ったほうがいいと思う。

A は宗教や国といった相手が身にまとっているカテゴリーをできるだけ取り払い、話している相手を 1 人の人間として見て接している。そして、自分が友達になりたいかを判断している。その一方で、友達になるために、相手の宗教や国に関心をもつことが大切だと述べている。宗教や国に関心をもつことは A にとって、より相手を知ることにつながるのだ。A は国や宗教と個人を分けて、個人に焦点をあてて接するという姿勢をとっているため、外国人に対しても偏見を持たずに接することができ、友人をつくることができているのかもしれない。

K、E、J、A は他の留学生と比べて様々な留学生と接することができている。彼らは相手への関心をもつことを忘れず、それを言動や態度に表して接しているので、友人が多いのではないか。

8. 国・言語・文化が同じ

国・言語・文化が同じであることもソーシャル・ネットワークの形成に関係している。D は親密度が高いコミュニティの 2 番目にタイ人を挙げている。日本という外国に來ているという条件に加え、母語や習慣が同じなので、D は寮のタイ人とあまり話さなくても自然と親密になっている。D 以外にも、インタビューで母語や習慣が同じなので、所属しているコミュニティとの親密度が高いことがわかる発言が多くあった。

筆者:何で 1 番を選んだの?インドネシア人の友達は。

I:最初もちろん同じインドネシア語で話せるので考えがわかりやすいと思います。他の留学生の友だちより私の考えが伝わると思う。

筆者:それは何で伝えやすいと思う? I:同じ国で育ったので私達の考えが似ている

と思う。似ていてとか。あの、言語が同じなので。

Iも国が同じなので考えが似ていることと、母語が同じなのでお互いの考えを理解しやすいという理由でインドネシア人コミュニティを1番に挙げている。同様に、Gも同国の台湾人コミュニティを1番に挙げ、言語が同じなのでお互い理解しやすいと述べている。

また、Cマレーシア人コミュニティも1番に挙げている。

筆者:これ(マレーシア人)が一番大事なのはどうして?

C:マレーシア人はさあ、やっぱり一番仲がいい人だからさ。で、何でも話せるみたい。例えば、国の問題とか、もちろんマレーシア人と話せば1番いいと思う。もしマレーシアの食べ物が恋してるとかその時やっぱり、マレーシア人のところに行って、色んなことを思い出す。両親の問題だったら多分別にEでも話せるけど。そしてマレーシア人はさあやっぱり多分国籍が同じだからね。

筆者:他の国の人と違う?

C:やっぱり自分の母語のほうが一番伝えやすいかなと思う。Eと話すとき、マレーシア人のほうが伝えやすい。日本語の問題じゃなくて、それは言語の欠点かなと思った。気持ちの伝え方。

Cは両親の問題は彼女のEに話すことができるが、マレーシアに関することはマレーシア人にしか話すことができない。同じ国同士でしか話せない事柄があるので、同じ国の友人との親密度が高くなるのかもしれない。また、母語が1番意思疎通ができるため、自分の気持ちが表現しやすい。それが、親密度が高い要因にもなっている。

ルワンダのHも国が同じであるほうが、共通しているものが多いと言う。そして、その国出身の人だけにしかわからない冗談を言い合えることもできる。Hはアフ

リカ出身ということもあり、Hから見ると、寮に住む学生は国単位の文化ではなく、アジアの文化を有しているということになっている。大陸が違えば、相手が自分を見ている視点も異なってくることがあるのだ。

また、言語や文化が異なることから、ソーシャル・ネットワーク形成が進まないこともある。中国人のBは日本語と英語で話すときは緊張してしまうので、中国語で話すときは安心して話せる。そして、他の外国人とあまり話さない1番の理由は、中国と台湾以外の留学生は中国語が話せないからだ。また、Bは外国人がパーティー好きというイメージをもっており、自分とは文化、習慣が異なるので仲良くなれないと思っている。このようにBは中国・台湾以外の留学生との間に言語、文化の違いを感じているため、他国の留学生とソーシャル・ネットワークを形成していない。

母語が1番自分のことを表現しやすい理由として自然で簡単だからとFは述べる。例えば、Fは日本語を話すときに、何を言いたいのかを頭の中でポルトガル語で考える。そして、その考えたことを日本語に翻訳して、言葉として口から発信する。さらに、発信する時に、文法と語彙も考えないといけない。このようなプロセスを経てはじめて、日本語が自分の考えとして外に発信される。反対に、Kは母語のポルトガル語を使うと、そうしたプロセスを経ることなく、自然に自分の考えを表現することができる。

国、言語や文化が同じ者同士でしかわかりあえない事柄があり、母語が1番自分の考えや気持ちを表現することができる。留学生は母語が同じほうが深いところまで理解し、悩みも話しやすいと述べていた。実際、同国人のコミュニティは、インタビューで留学生に挙げてもらうコミュニティのなかで、ほとんどが1、2番目親密度が高いコミュニティになっていた。

9. 偶然起こる友人の紹介

ソーシャル・ネットワークの形成は、自分の力だけではなく、友人からの紹介の影響もある。友人からの紹介で、意図せずにソーシャル・ネットワークが形成されることがあるのだ。例えば、4月に、Kは学校の前でEに初めて会った。話している時に、以前から友人だったAも学校の前にはいたので、KはEにAを紹介した。それか

ら E と A は友人になった。K という共通の友人が E と A にいたので、K が 2 人をつなぐことができたのだ。

同様に G も友人からの紹介でモロッコ人の友人 P をつくった。P はクラスや住んでいる階も G と異なり、G と全く接点が無かったが、友人のおかげで G は O とつながりをもつことができた。

また、D はインドネシア人とモンゴル人を 3 番目に親密度が高いコミュニティに挙げた。その理由は彼らが D と同じクラスに多くいるからだ。そしてインドネシアとモンゴルの友人が多いおかげで、彼らが他のインドネシア人、モンゴル人を D に紹介することがあった。その結果、D はタイ人ながらインドネシア人、モンゴル人全員と知り合うようになり、彼の親密度が高いコミュニティにインドネシア人とモンゴル人のコミュニティが挙げられたのだ。

このように、ソーシャル・ネットワークの形成は自分の意志でしていくことが多いが、時には偶然起こる友人の紹介によって広がりを見せることがある。

10. 中国人・台湾人の壁

インタビューで、中国人・台湾人とソーシャル・ネットワークが形成できないとの発言が多かった。寮のラウンジや RA ルームでも中国人や台湾人はあまり見かけない。I も留学生のなかで台湾人と中国人が最も関わりが薄いと言う。

筆者：それはどうしてだと思う？

I: 仲良くしにくいかな。台湾人が台湾人と一緒に遊んで。中国人は中国人とだけ遊んで。他の国の人と喋ることがあまりない。

台湾人と中国人は同じ国のコミュニティだけに所属していることが多いため、他の国の留学生と交流する機会があまりない。そのため I も交流機会を失い、中国人、台湾人と仲良くなれていない。

また、K は中国人と関わりの薄さを「壁」と表現する。

筆者：逆にちょっと関わりづらいグループとか人ってある？

K:やっぱ中国人だな。例えば、人が立ってる時にさ、あるなんとかを見てて、自分から話したいっていうのあるんだよね。けど、中国人が中国人のなかで話してるときに壁を感じてるんだよね。ここに入っちゃだめだよ。侵入禁止みたいな。

Kは他国の留学生と接するときと異なり、中国人との間に心理的な壁を感じている。Kは誰にでもフレンドリーに接することができるが、中国人に接するのは難しいと言う。さらに、入寮して時間が過ぎていくと、留学生はいくつかのコミュニティに所属し、コミュニティが新しく生まれることは少なくなる。ソーシャル・ネットワークの固定化が起こるのだ。7、8月の1学期が終わったころからは、留学生は寮生活にも慣れ始め、ともに時間を過ごすメンバーやコミュニティに変化は起こらなくなった。そのため、中国人の友人がほとんどいないなかで、入寮して何ヶ月か過ぎた時期にKは突然知らない寮の中国人に話しかけることに抵抗を感じると言っていた。

また、中国人からは他国の留学生とのソーシャル・ネットワーク形成に関して、別の視点があった。中国人のBは他国の留学生と関わりたくないのかという質問に関して、

筆者:You do not want to try to communicate with others?

B:はい。私は中国人の友だちがいる。台湾人の友だちがいる。学校以外の友だちがいる。私は寂しくない。I think I do not need make more friends. It is ok. It is not important for me.

と述べた。Bは現在のソーシャル・ネットワークに満足しており、これ以上友人を作る必要がないと感じている。そのため、他国の留学生と交流をしていない。

中国人のAは他の中国人と違い、他国の留学生とも関係をもっている。彼女は他の中国人が他国の留学生と話さない理由として、

恥ずかしいかな。外国人は言葉は違うし、考え方は最初わかんない。で、友達で
きるかどうかわかんない。ちょっと怖い。そして恥ずかしい。中国人は同じ出
身。そして中国語みんな使える。

と述べている。Aによると、接する相手が自分たちとは違うことに対して、恐怖や不
安の度合いが中国人は大きいのだ。実際、Aは外国人と話すことを他の中国人から称
賛されている。Aは他の中国人も他国の留学生と話したいが、急に話かけたりするこ
とはできず、どうやって話せばいいのかもわからないため、ソーシャル・ネットワー
クを形成するまでにはいたっていないと言う。

このように、留学生が中国人・台湾人に対して感じる心理的な壁があり、反対に
中国人・台湾人が留学生に対して感じる恐怖や不安があるために双方の間で隔たりが
生まれていることがわかる。また、中国人によっては、友人が十分なため、これ以上
友人をつくる必要性を感じていない。

11. 1人が国の印象を決める

1人が起こした出来事が原因で、その国に対する印象が悪くなり、ソーシャル・ネ
ットワーク形成に影響を与えることがある。

7月頃、RAに留学生からモンゴル人留学生が住んでいる部屋が深夜うるさかった
という苦情が入った。その苦情が数日後もあったので、RAで話し合い、モンゴル人
をすぐにRAルームに呼び、注意をした。それから苦情は来なかったが、留学生の話
を聞いていると、5階のあの部屋がうるさいというような話を聞くことがある。そし
て、留学生からは、「モンゴル人はうるさいから嫌だ。マナーが悪い。」という趣旨
の発言を聞くようになった。

様々な国の留学生がいる空間になると、個人だけでなく、国という側面が強調され
ることもある。モンゴル人の例のように、うるさかったのは1人だけだったかもしれ
ないが、あの部屋のモンゴル人は騒いで、周囲の部屋に迷惑をかけているという認
識が生まれる。そうになると、他の留学生からモンゴル人はうるさい国民だというレッ
テルが貼られることになりかねない。ソーシャル・ネットワークを形成するときに、

個人だけでなく、国の評判も形成に影響することがあるのだ。自分の国の評判が、自分が接する留学生にとって悪ければ、自分の印象も悪くなり、その留学生と関係を結べない可能性がある。つまり、多文化な環境下では、自分は国の代表であることを忘れず、自分の行動が他の留学生が自分の国に対して抱く印象を変えることがあることを意識して、行動することが大切なのだ。

12. 口に出して言えない留学生

留学生は他の留学生に言いたいことがあっても口に出して言うことはなく、それが他の留学生への不満になることがある。留学生は時々、誰かの部屋で騒ぎ、周りの部屋の留学生からうるさいと思われることがある。その時、留学生にもよるが、直接その問題を起こしている留学生の部屋に行って、うるさいから静かにしてほしいと伝える留学生は多くない。たいてい、留学生は寮の LINE グループに誰かうるさい人がいるから静かにしてほしいと投稿するか、RA にその人の部屋に行って伝えてほしいと LINE で連絡してくる。

私はなぜ直接その部屋に行って注意をしないのか、留学生数名に尋ねた。そうすると、「何かわからないけど言いづらい。」、「自分は RA じゃないから。」、「(その部屋にいる)留学生と関係を悪くしたくない。」という声があった。留学生は日本人よりも直接相手に自分の意見をいうものだと、私は勝手に思い込んでいたが、そんなことはなかった。留学生も人によっては、直接相手を批判するようなことを言いたくないのだ。言いたくても言えないことが留学生にとってストレスになり、騒々しくしている留学生への不満が募る。それが、ソーシャル・ネットワーク形成に影響を与えることもありうるのだ。

13. オンライン上でのソーシャル・ネットワーク形成

留学生同士はオンライン上でもコミュニケーションをとり、ソーシャル・ネットワークを形成している。留学生の多くはインスタグラムを使用している。インスタグラムへの投稿を見て、留学生はお互いの近況を離れていても知ることができる。また、それは対面での会話のきっかけにもなる。例えば、誰かが面白いダンスをしている動

画をInstagramに投稿すると、その後会った留学生とそのダンスの話で盛り上がることもある。留学生はInstagramを日常生活を他の留学生たちと共有し、楽しむツールとして使っているのだ。

また、他のツールとしてLINEがある。個人的な会話はもちろんだが、寮全体のLINEグループがあり、留学生やRAはそこに寮の連絡事項や他愛もないことを投稿する。

他にも、LINEのKebab Groupがある。これはケバブをよく買う留学生やその留学生の周辺にいる留学生で構成されているグループである。グループ設立のきっかけは筆者を含めて数名でケバブを買いに行った時のことだった。ある留学生が、ケバブのグループがあったほうがいいんじゃないかという軽い思いつきでグループをつくったのがきっかけだった。そこから留学生が他の留学生をグループに招待し、気づけば、グループの参加人数は30名を超えていた。理由はわからないが、とりあえず誘われたら、留学生はグループに参加しているのだ。このように、留学生が所属しているLINEグループは数多くある。それは意識して所属しているのではなく、何となく所属していることが多い。そのグループで、グループの名前や作成当初の目的に関係なく、誰かが冗談や面白い画像を投稿してそれに他の留学生が何となく反応する。その何となくの積み重ねがオンライン上でのソーシャル・ネットワーク形成を促進する。そして、それが対面で会ったときの会話のきっかけにもなり、ソーシャル・ネットワーク形成にも影響している。

14. 年による留学生の傾向

年によって留学生にも傾向があり、ソーシャル・ネットワークの形成しやすさが異なっている。Kは2017年10月から入寮しているので、2017、2018、2019年度と留学生の入れ替わりを3回経験していることになる。そして、Kは2019年度が1番留学生同士の交流が多いと言う。Kは「みんながラウンジに一緒に座ったりして、話合ったりする。とか、みんなが一緒に決めて出かける。ご飯食べようぜみたいな。」と言い、年を経るごとに国を超えた留学生同士の交流が増えていると指摘する。そし

て、Dのようにパーティーを開催し、様々な人を呼ぶという人は2017、2018年にはいなかった。また、Eのようにモンゴル人のコミュニティ以外でも友人をつくるようなモンゴル人はいなかった。Kによると、2017、2018年とモンゴル人はモンゴル人コミュニティで固まって行動することがほとんどで、他国の留学生と交流することはなかった。しかし、2019年はDのパーティーに参加するモンゴル人が何名かいたり、学生ラウンジで他の留学生と交流したりするなど、モンゴル人が他国の留学生と交流する様子が見られる。Kはなぜ年によってこのような現象が起こるのかわからないと言う。1つ推測できるのは、DやEのような例年にはいないタイプの社交性をもった留学生が何名かいるということだ。彼らが起点となって、他国の留学生と交流をもつようになる。そして、DやE以外の留学生も、DやEが他国の留学生と関わっている姿を見て、興味を持ち、他国の留学生と関わりだすようになるのではないか。

第5章 ソーシャル・ネットワーク形成への方策

1. 分析の目的と前提

この章では、第4章で挙げたソーシャル・ネットワークの形成要因に関して、今後、寮生活で留学生がどのように考え、行動すればソーシャル・ネットワークが形成しやすくなるのか分析する。また、今後、寮の運営をどのようにおこなえばよいのかも分析する。ただし、性格、国、言語など自分の努力では変えることが難しい項目についての記述はしない。寮運営に関しても、どのような留学生が入寮するかなど寮ではコントロールできない部分は記述しない。留学生、寮運営どちらも努力次第で変えることができる要因について分析する。

インタビューで、ソーシャル・ネットワークには「広さ」と「深さ」の2軸があることが明らかになった。広さとは所属しているコミュニティの多さである。寮内で7、8つのコミュニティに所属する留学生もいれば、1つだけのコミュニティに所属している留学生もいる。深さは親密度とも言い換えられる。親密度は、インタビューを参照すると、コミュニティ内で冗談を言えること、本心で話せること、自分らしく自然体でいられることで、親密度が高いほど留学生とそのコミュニティは深い関係にあると言える。個人とコミュニティの関係のように、個人対個人の関係も同様に、ソーシャル・ネットワークが広いほど、友人の数が多く、深いほど個人間の親密度が高い。

ソーシャル・ネットワークの形成は充実した留学を送るために必要であるが、それは必ずしもソーシャル・ネットワークが広く、深いほど、留學生活が充実するということを意味しない。実際、Bは現在のソーシャル・ネットワークで十分満足しており、これ以上広げたいとは思っていない。留学生によって満足するソーシャル・ネットワークの広さと深さは異なるのだ。ただ、GやIのように、ソーシャル・ネットワークを広げたいが、性格などの問題で、広げられない留学生がいることも事実である。そのため、留学生と寮にどのようにすればソーシャル・ネットワークを広げ、深

くすることができるのか方策を提示することは、留学生によってはより充実した寮生活を送ることにもつながる。したがって、ソーシャル・ネットワークを広げ、深くするにはどうすればよいかに焦点を当てて、分析を進める。

2. 留学生が変えられる要因

留学生がソーシャル・ネットワークを広げるためにできることは大きく分けて、2つある。1つ目は場所・活動への参加を増やすことで、2つ目は他の留学生と接する時に自分の態度や姿勢を変えることだ。

(1) 場所・活動への参加を増やす

場所・活動への参加を増やすことで、知り合う留学生も増え、ソーシャル・ネットワークの形成が促進される。

場所・活動への参加のやり方は様々だ。例えば、留学生が主に交流する場として、学生ラウンジ、RA ルームがある。そこで、今まで関わったことのない留学生のコミュニティに入ることもできる。ただし、学生ラウンジ、RA ルームでは入寮初期を除いて、既に形成されたコミュニティ内で交流していることが多いので、そのコミュニティに友人でもない限り、新しいコミュニティに1人で参加することは難しい。

また、パーティーへの参加は初めが肝心だ。パーティーははじめのころは様々な人が来ていたが、数ヶ月が経つと、メンバーが固定化されており、新しく他の留学生が参加することが難しい。また、夜遅くから行われ、部屋を暗くしてミラーボールを使用するため、そのような条件でも問題がないという留学生しか来ない。そのため、定期的に行われるパーティーには、初めの頃参加してみて、自分に合うかどうか見極めが大切だ。

これら以外には、Hのようにキッチンや廊下で他の留学生が1人である時に声をかけるほうがハードルは低い。キッチンで、相手を作っている料理などの話をしながら、徐々に関係を築いていく。この交流は1対1で行われることが多く、廊下を歩

くことと料理を作ることは、日常生活に組み込まれているため、留学生にとって実践がしやすい。ただ、パーティーのように長時間、他の留学生と交流することはないため、留学生と接点をもつ手段としては有効だ。

活動に関してはバスケットボール、クラブがある。バスケットボールは放課後にやっていることが多い。メンバーが固定化されている傾向はあるが、一緒にバスケットボールをするという活動があるので、そこまで話す必要もなく、自然と活動に参加できる。しかし、留学生のインタビューでは、バスケットボールは親密度が高いコミュニティには挙がっていない。あくまでバスケットボールをすることがメインなので、キッチンや廊下のように、他の留学生と接点をつくる機会にはなる。その後、一緒にバスケットをした留学生と深い関係を築けるかはバスケットコート以外での留学生の行動次第になる。クラブも同様に、留学生からは親密度が高いコミュニティには挙がっていない。交流が目的ではなく、空手や柔道を学ぶことが目的なのだ。

場所・活動への参加に関して、キッチン、廊下、バスケットボール、クラブが他の留学生と接点をもち、ソーシャル・ネットワークを広げていくハードルが低いものと言える。それ以外の RA ルーム、学生ラウンジ、パーティーは入寮から数ヶ月が経つと、コミュニティの親睦を深める場となったり、メンバーが固定化したりする。そのため、入寮当初にお試しでいくつかのコミュニティに参加し、居心地がよいコミュニティを見つけて、それらの場を利用してソーシャル・ネットワークを形成していくことが望ましい。

(2) 相手と多くを共有し、「良く」コミュニケーションしようとする

留学生が他の留学生とさらに広く、深くソーシャル・ネットワークを形成するために、留学生自身が意識して変えられることがある。

1つ目はより多くのことを共有することだ。インタビューでは、情報、活動、感情、時間を多く共有すれば、親密度が高くなるということがわかった。例えば、留学生が他の留学生と多くの時間を共に過ごし、自分の悩みなど深い部分まで開示すれば、ソーシャル・ネットワークを形成しやすくなるはずだ。また、寮で行われている活動にはできるだけ参加し、他の留学生と協働する経験を重ねることで活動の共有が

増えていく。

2つ目は相手と「良く」コミュニケーションをしようとするということだ。これには様々な意味合いが含まれる。インタビューでは、相手に自分が関心をもって話を聞いているということが伝わると信頼関係が生まれるとあった。自分の意見を言いつつも、相手の話に耳を傾けると言うことを実践できている人には信頼が生まれやすい。

また、相手と自分の考えが似ていると親しみを感じやすくなった。人間の性格や考えは簡単に変えることは難しいかもしれないが、接している相手との類似点を見つけることはできる。例えば、相手の好きなスポーツは何か、好きな食べ物は何かなど、相手のことを知り、自分との共通点を発見する。相手との相違点を面白がることも大切な要素だと思う。寮生活では、様々な国の留学生が居住している。友人が多い留学生は、他の国の留学生の言語や料理などの文化に興味をもち、それを楽しもうとする意欲が強い。言い換えれば、様々な国の友人がいる留学生は、相手と違う点があっても、それに対して寛容で、むしろその違いに強い関心をもって接する傾向がある。

これらが、インタビューや筆者の観察から得た他者とソーシャル・ネットワークを形成するためのいいコミュニケーションである。そして、これらのヒントをもとにしながら、自分のコミュニケーションを振り返り、修正していくことで、他の留学生とソーシャル・ネットワークが形成しやすくなると考える。

3. 寮の運営側が変えられること

寮の運営が変えられることは寮生活のなかに留学生が他の留学生と交流できる「仕掛け」を増やしていくことだ。例えば、RA イベントでは、流しそうめん、クリスマスパーティーを通じて、今まで知り合いではなかった留学生同士が知り合うことができた。RA イベントで、ソーシャル・ネットワークの広がりを目指すなら、留学生同士が協働できる活動があるイベントに沿ったほうが目的が達成されうる。また、RA イベントのようなイベントを寮の運営がさらに企画していくこともできる。そうすることで、意図的にではあるが、留学生同士の交流機会を増やすことができる。

しかし、実際には、寮の運営が留学生のソーシャル・ネットワーク形成に関与でき

ることはあまりない。寮の運営は留学生の留學生活の相談にのったり、清掃員が寮内を清掃したり、警備員が寮内の秩序を保ったりするなど、あくまで寮生活を留学生が快適に過ごすための業務をしている。RA イベントも、RA が実施するので寮の運営ではない。つまり、ソーシャル・ネットワーク形成は留学生の自主性に委ねられている部分が多い。

第6章 結論

本稿では、東京日本語教育センター留学生寮に居住する留学生へのインタビューとRAとしての参与観察を通じて、ソーシャル・ネットワーク形成の要因を明らかにした。そして、留学生と寮の運営がソーシャル・ネットワークを広く、深くするにはどうすればよいのか方策を提示した。その結果、ソーシャル・ネットワーク形成には、様々な要因が影響しており、それらは変化可能なものと不変なものがあることが明らかになった。前提として、ソーシャル・ネットワーク形成には性格の影響を受け、人によって求めるソーシャル・ネットワークの広さと深さは異なっている。そのため、自分が求めるソーシャル・ネットワークを理解し、それに合ったやり方で、形成していくことが必要になってくる。

また、ソーシャル・ネットワーク形成には段階がある。はじめはそれぞれの国や学校の授業など当たり障りのない話から形成が始める。その後、友人関係が持続していくと、お互いの悩みやどうでもいいような冗談を言い合える仲になっていく。そのような仲のいい留学生同士を見ていると、そこには国籍、人種、宗教などを超えた個人対個人の結びつきがある。20カ国以上の留学生がこの留学生寮で共同生活を過ごしている。そして、留学生は日々、喜怒哀楽を経験しながら、ソーシャル・ネットワークを形成していく。留学生寮は、様々な人間関係が交錯するソーシャル・ネットワーク形成の実践の場なのだ。

留学生寮で留学生が学んだことは、対人関係を良好にするために、誰もが参照となることである。相手に関心を向ける、類似性を見つける、何か一緒にやってみるなどの行動は、誰かと関係を築くために、日常的に人々がやっていることである。

日本には今後も外国人が増加し、「多文化社会」になっていくことが予想される。日本人と外国人、外国人と日本人の関わりも増えてくる。現在でも外国人に関連する様々な問題が噴出しているが、この寮で留学生が実践した個人対個人の関係へと向かえば、差別や偏見ができる限り取り払われ、少しでも外国人が暮らしやすい社会にな

っていくだろう。

本研究にはいくつか課題が残されている。今まで挙げたソーシャル・ネットワークの形成要因が、それがソーシャル・ネットワークでと因果関係があるのか不明瞭な部分が多い。ソーシャル・ネットワーク形成の過程に影響する要因は様々であり、カテゴリー別より、留学生の気持ちや物語を追った構成に近づければ、より形成過程が把握できたと考える。また、今回の研究は留学生のインタビューと筆者の参与観察をもとにして、論文を執筆した。他の留学生や RA のインタビューも加えると、寮生活のソーシャル・ネットワークがより詳細にわかるだろう。

注

(1)奨学金事業、留学生支援事業、学生生活支援事業の3つを中心として活動している独立行政法人。留学生支援事業では、外国人留学生の受け入れ、日本人学生の海外留学推進を行っている。

独立行政法人日本学生支援機構のサイトより(<https://www.jasso.go.jp/index.html>) (2019/12/14 参照)。

(2)「外国人留学生として、日本の大学(学部)等に入学を希望する者について、日本の大学で必要とする日本語力及び基礎学力の評価を目的に実施する」試験。試験は6月および11月の年2回実施される。出題科目は、日本語、理科(物理・化学・生物)、総合科目および数学で、留学生は志望校が指定する科目を受験する。

独立行政法人日本学生支援機構のサイトより

(https://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/eju/index.html) (2019/12/19 参照)。

(3)日本語を母語としない人の日本語能力を測定する試験である。2011年の受験者数は全世界で約61万人にのぼり、世界最大規模の日本語の試験になっている。留学生の就職、昇給、昇格、資格認定などに活用される。

日本語能力試験のサイトより(<https://www.jlpt.jp/>) (2019/12/22 参照)。

主要参考文献

大西晶子

2016 『キャンパスの国際化と留学生相談』 東京大学出版会。

小松翠

2013 「中国人女子留学生の友人形成及び友人不形成に至る過程に関する研究」

『群馬大学国際教育・教育センター論集』 (12):71-86

呉曉良

2017 「在日留学生のソーシャル・ネットワークに関する研究の総括」

『地球社会統合科学研究』 (6):29-39。

財団法人 国際学友会

2016 「国際学友会の歩み」

https://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/jlec/tjlec/guide/___icsFile/afieldfile/2016/08/08/kokusaigakuyuukainoayumi-1.pdf

(2019/11/16 参照)。

鈴木洋子

2011 『外国人留学生と留学生教育』 春風社。

田中共子

2000 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』 ナカ ニシヤ出版。

筑波大学

2016 「Global Village について」

https://www.tsukuba.ac.jp/campuslife/pdf/global_village201612.pdf

(2019/11/23 参照)。

出口朋美、八島智子

- 2008 「実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係」『多文化関係学』(5):33-47。

東京日本語教育センターホームページ

https://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/j_lec/tjlec/index.html

(2019/11/16 参照)より。

日本学生支援機構

- 2019 「平成 30 年度外国人留学生在籍状況調査結果」

https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2018/index.html

(2019/11/1 参照)より。

正宗鈴香

- 2015 「グローバル人材の育成を意識した国際寮の活用—国際寮の社会的機能
れる寮教育—」

『留学交流』54(9):1-8。

正宗鈴香

- 2015 「寮生活における留学生の異文化社会適応、人格形成、言語習得に
関する事例研究：国際寮の教育的昨日の可能性」

『麗沢大学紀要』98:63-72。

花木亨、塩澤正

- 2007 「留学体験を成功に導く要素に関する解釈学的研究—アメリカで学ぶ
日本人留学生の寮生活に関するケーススタディーから—」

『人文学部研究論集』(17):129-156。

範玉梅

- 2007 「新留学生の精神的成長に関するケース・スタディー：日本語教育への
示唆」『阪大日本語研究』(16):161-192。

Bart,R.and E.Marie.N.

- 2014 Understanding friendship and learning networks of international and host students using Longitudinal Social Network Analysis.
International Journal of Intercultural Relations 4:165-180.

Blake,H., Devan,R., and R.Kelly,A

- 2011 An analysis of friendship networks, social connectedness, homesickness, and satisfaction levels of international students.
International Journal of Intercultural Relations 35(3):281-295.

松下達彦

- 1999 「留学生のためのソーシャル・サポートと日本語教育－教室外環境と教室
内環境の融合を目指して－」
『留学生交流』 11(12):16-19。

村上律子

- 2005 「アメリカ人留学生のソーシャル・ネットワークとホストとの親密
化－支援制度による接触を中心に－」
報告書『外語大における多文化共生:留学生支援の実践研究』 1-15。

山川史

- 2011 「「自分の居場所探し」としてのソーシャル・ネットワーク形成」
『ICU 日本語研究』 (8):49-63。

山川史

- 2016 「短期留学生の大学寮におけるソーシャル・ネットワーク形成－教育資
源としての寮の活用－」
『留学交流』 66(9):5-20。

山本冨里

2014 『戦後の国家と日本語教育』 くろしお出版。

吉田千春

2016 「混住寮では何が学ばれているのかーレジデント・アシスタントの語りを中心にー」
『国際日本学研究論集』(4):1-15。

Summary

Forming social network of international students in dormitory life

-the case of Tokyo Japanese Language Education Center-

The purpose of this thesis is to find factors to form social network of international students in dormitory life. After finding, the thesis focuses on how to broaden and deepen social network from perspectives of international students and dormitory office. The ways to research are semi-structured interview for 11 international students and participant observation as resident assistant.

There are lot of factors to affect forming social network in dormitory life. International students form social network through the places and activities such as lounge, RA room, party, and club activities. Also, personality, similarity and language affect forming social network. There are more factors to affect forming social network and many episode are used to draw ethnography in detail.

In the analysis section, the ways are suggested to broaden to broaden and deepen social network from perspectives of international students and dormitory office. Two ways from international students are joining more places and activities and try to communicate with others positively. Actually, the office cannot help promote social network.

In conclusion, it is said the ways for social network are applied to many human relationships. The relationship between individuals may remove prejudice for culture.

謝辞

本稿の執筆には多くの方々の協力なくては成し得なかった。1年を通して、論文執筆の指導をしていただいた関根久雄先生には深い感謝を申し上げたい。また、ゼミで論文へのコメントをしてくれたゼミ生にも感謝したい。調査地となった東京日本語教育センター留学生寮の留学生、事務室職員の協力は論文の完成に必要不可欠だった。論文執筆に協力していただいた方々に改めて謝意を表したい。最後に、大学進学を支援し、ここまで育ててくれた両親に感謝をしたい。